

## 前までのあらすじ

流遠るとおやみひめは、小学六年生の普通の女の子。  
学校があつて、友達がいて、好きな男の子がいる。

しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまう。

少女の名はツバキ・タカチホ。

彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。

ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅せんめつであり、彼女はそのための存在——〈機獣少女きじゅう〉だった。

〈カタストロ〉を殲滅せんめつし、ツバキは故郷の惑星ゼヘナに帰り、やみひめは以前のように普通の生活に戻れると思っていた。

しかし世界は改変され、やみひめと橘アサトたちばな、そして友人のクラウド・P・ブランはゼヘナに転移してしまう。彼等はゼヘナを危機に陥おとしれている別の敵性体——〈ブレケース〉の存在を知り、その打倒に協力する事となった。

復活した古代種と呼ばれる機獣——〈ステインガー〉を殲滅すべく発動された〈ヒナミ総力戦〉。

作戦は成功したが、やみひめとツバキは〈ステインガー〉の骸むくろから出現した少女から攻撃を受けてしまう。戦いは〈ヒナミ・シテイ〉各所で続いていた。

一方、彼女等とは別に〈ステインガー〉の封印施設へ向かったロゼットとアニス、そしてアサトの三人は、謎の少女を発見する。アニス曰いく、少女の名はアヤカ・シユバイツァー。〈始まりの機獣少女〉と呼ばれる存在だった。

※登場人物紹介は[こちら](#)

機獣少女ゾイカルやみひめ *The NOVEL REVIVAL*

『こんな形でまた会う事になるとは思わなかったよ』

中性的で、どこか超然とした、穏やかでいてミステリアスな声音こわねが、戦闘を終えたばかりの二人の耳朶じだを打つ。

〈ブラスター・システム〉を起動させたツバキと共に、やみひめは〈分断するもの〉を使い、白いゴシックロリータの少女を無力化した。その直後の事だ。

気を失っているゴスロリ少女の左腕に巻かれた、ヘアゴムを思わせるシンプルな腕輪。拡声器を通したような機械音声マシン・ヴォイスは、それに繋がっている逆十字のペンダントが発しているようだ。

『随分と可愛らしい姿になっているね——〈キョウシュウキ〉』

「——っ!？」

ペンダントが発した『キョウシュウキ』という言葉に、やみひめの中の何かが反応した。

聞いた事のない言葉だが、不思議と知っているような響きだと感じた。

「……キョウシュウキ？ それは、やみひめさんの事を言っているんですか？」

身に覚えがないツバキは、それが自分に向けられた言葉ではないと判断したのだろう。

となれば、この場にいるもう一人——やみひめを指していると考えるのは当然だ。

『これは失礼、まだ幼いのに立派なお嬢さん』

「ぶえっ……!？」

ペンダントの謝罪にツバキが赤面する。まるで二枚目の紳士に耳元で愛の言葉を囁ささやかされた初心うぶな乙女のように。

相手はペンダントで、言ってしまうば物だ。だがその声は、言葉だけで人間の感情を動かすだけの威力がある。その正体は呪いでペンダントの姿に変えられてしまった、何処どこぞのイケメン王子だと言われても信じられる。

『自己紹介を先にすべきだったね。僕は〈シラヒメ〉。〴〵覧の通り『物』だからね、呼び捨てで構わないよ』

「シラヒメ？ しかし、『僕』と……」

『ああ。性別はないけど、一応、僕は『男性格』だからね。それなのに『ヒメ』なんて、ひどいだろう？ 付けた奴の嫌がらせだよ』

「はあ……」

自身を物だと言ったが、彼——シラヒメの言葉はとても流暢りゅうちやうで感情も乗っている。ツバキとの会話もスムーズで、人間臭いとやみひめは感じた。

「驚きました。〈カグツチ〉のような存在が、他にもあったんですね」

『——ツバキよ、まだ気を許すな』

件の〈カグツチ〉が会話に加わる。姿は武器のままだが、〈シラヒメ〉と同じく機械音声で、古風だがやはり彼女も人間臭い。

『シラヒメ〉とやら、自己紹介と言うなら、名前以外の情報も明かすがよい。貴様の主の事も含め、洗いざらいだ』

『……………』

『ふん。どうした？ 後ろめたい事でもあるのではないか？』

「〈カグツチ〉、もつと言い方があると思います」

高圧的な態度の〈カグツチ〉に、〈シラヒメ〉が気分を害したと判断したのだろう。ツバキがやんわりと窘める。

だが――

『…………君は〈カグツチ〉と呼ばれているのかい？』

腹を立てていたのではなく、何か思うところがあつたらしい。そう言った〈シラヒメ〉の口調は、心なしか寂しさを含んでいるようにやみひめは感じた。

『それが何だというのだ』

『そうか、そういう事か…………』

「……………」

何かを察したらしい〈シラヒメ〉の様子に、ツバキが首を傾げる。

対照的に、やみひめは必死で平静を保とうとしていた。この場において、状況をすべて把握しているのは彼女だけだ。

〈カグツチ〉の本当の名前と正体――それは〈ヤミヒメ〉と呼ばれた機獣であり、流速やみひめの平行世界における同一存在である。

だが、すべてを思い出した彼女はもういない。その力と想いは、やみひめの中に溶けた。

今の〈カグツチ〉の記憶と人格は、やみひめがツバキのために再起動した模倣品でしかない。

何故かは判らないが、〈シラヒメ〉は〈カグツチ〉の正体を知っている。恐らく、再起動によって本来の自分を忘れている状態である事も気付いている。真実を知らされて、〈カグツチ〉とツバキはどう思うか…………。

「あ、あのっ――」

『いや、すまない。どうやら僕も気が動転していたらしい』

やみひめが何か言おうとしていたのに気付かなかつた風を装い、ペンダントの姿をした何かが続ける。

『僕の身の回りの状況を、何の関係もない君達とごっちゃにしてみましたよ。すま

なかったね。忘れてくれると助かる』

ひょうひょう  
飄々とした口調は変わらないが、しっかりと〈シラヒメ〉の誠意が込められているのが伝わってくる。

(状況を判った上で、言わないでくれた？ 私のために……?)

一瞬そう考え、すぐに違うと気付いた。これは〈カグツチ〉とツバキのためだと。なぜなら、やみひめ自身がそのために、残酷かもしれないと承知した上で、やった事だから。

〈シラヒメ〉もまた、〈カグツチ〉とツバキの関係を把握し、〈ヤミヒメ〉の事については触れないでくれたのだろう。恐るべき洞察力と判断力だが、それ以上に彼の優しさが窺える。

しかし、問題はそれだけではない。

やはり〈シラヒメ〉は、〈カグツチ〉の正体である〈ヤミヒメ〉を知っている。でなければ、この状況だけですべてを把握するなど不可能だろう。もつとも、彼の知る〈ヤミヒメ〉が、本来の〈カグツチ〉と同一とは限らない。平行世界は無数に存在するのだ。ゼヘナとはまた別の世界に、機獣としての〈ヤミヒメ〉が存在してもおかしくない。

そして、やみひめを〈キョウシュウキ〉と呼んだ事。意味は判らないが、そう呼ばれる『別のやみひめ』を〈シラヒメ〉は知っている。

ゴスロリ少女の正体も含め、判らない事が多い。

最大の脅威である〈ステインガー〉の殲滅は果たしたが、やみひめはこれで事態が終息するようには思えなかった。

第三十二話

『アイゾウ』

〈ヒナミ総力戦〉発動から二十分ほどが経過していた。

何かに集中していれば一瞬で過ぎ去ってしまうが、極度の集中状態を続けるには長い時間だ。それこそ、命のやり取りをするには。

「——ふッ！」

短く息を吐き、リツは得物の槍を敵に突き立てる。

「……滅せよ！」

続けて発動言語。流し込まれた機力が威力に変換され、〈ステインガー〉の幼体は力なくその場に頽れた。

「はあ……はあ……」

肩で息をしながら、愛用のMBデバイス〈シューツェン〉の穂先を抜き、迫る別の幼体を牽制する。汗で濡れたベリーショート黒髪が、顔に張り付くのが気持ち悪い。すぐにもシャワーを浴びて、空調の効いた部屋で本が読みたい。連日の忙しさを積まれた本の山を崩したい。新刊だって出るのだ。

だから——

「鬱陶しいのよッ！」

もつとも近い幼体の懐に飛び込み一突き。すぐさま後方に迫っていた別の幼体の頭部に一突き。更に右手から突進してきた幼体を躲し、すれ違い様に側面に一突き。

「——滅せよ……ッ!!」

流し込まれた三分分の機力が、同時にそれぞれの体内で威力へと転化。三方からリツを囲んでいた幼体が、ほぼ同時に骸と化した。敵に流し込まれた機力は、しばらくは状態を維持出来る性質を持っている。こういう場合は、いちいち一体ずつ殲滅するより効率が良い。

「すごいです、先輩！　そういう戦い方もあるんですね」

背中に気安い感触と共に、尊敬の声が届く。〈機獣少女〉で、事務所の後輩でもあるモカだ。小学六年生と四つ年下で、先輩のリツを慕ってくれている。

「……背中合わせとか、恥ずかしいんだけど」

「疲れて連携が雑になってます。今の先輩、格好良かったですけど、危なっかしいです」  
以前は委縮して意見など何も言えなかった後輩が、随分と言おうようになったと思う。しかも、疲れは見えるが、消耗はリツの方が明らかに激しい。恐らく、モカの方が機力の容量が多いのだろう。加えて高い可能性を秘めている。リツが〈機獣少女〉を『卒業』するより、モカに実力で追い抜かれる方が早いかもしれない。

「本当——生意気」

〈シューツェン〉を構え直し、包囲の輪をじりじりと狭めてくる幼体群に睨みを利かせ  
る。

確かに疲労で連携が雑になっていた。自分達は凡人だ。こんな危険な作戦に、本来なら  
志願すべき実力ではない。なればこそ、沈着冷静に行動しなければならない。この生意気  
になった後輩を死なせないためにも。

「えへへ……」

背中では照れ笑いを浮かべているが、脳天気さが感じられない。モカもやはり消耗してい  
るのだ。

「抜けるよ！」

「はい！」

囲まれてはいけない。比較的敵の密度が少ない場所を狙い、やや強引にでも突破する。

「滅せよッ！」

戦斧から槌矛に強化されたモカのMBデバイス（リーピン）が、もはや凶器としか呼  
べない威容に相応しい威力で幼体をまとめて薙ぎ払う。敵に機力を流し込まずとも、単  
純に鈍器としても使えるだろう。彼女の小柄で可愛らしい容姿とは差異が激しすぎる  
得物だ。

「――滅せよ！」

こちらも負けていられない。槍の特性を活かし、モカの死角を狙う幼体を次々に迎撃  
する。張り合うつもりはないが、そのくらいの気持ちでいなければ心が折れそうになる。

どれだけ倒したかなど判らない。数えている余裕などなかった。自分達の役割は敵を全  
滅させる事ではなく足止めだが、それはすなわち、終わりを自分達で決められないという  
事でもある。（ステインガー）の本体はどうなった？ 救援も撤退指示も来ないという事は、  
まだ健在なのか？ すでに他の作戦参加メンバーが全滅していたとしたら、此処で踏ん張  
る事に意味はない。

「……………」

ちようどいい高さの民家を見つけ、屋根の上に一時避難する。幼体は飛び道具を持たず、  
飛行能力もなく、蠍のような姿では建造物をよじ登るには不向きなため、こうして二人  
は定期的に休息を挟んで戦っていた。

「……どうなったかな」

彼女等の位置からでは、巨大とはいえ（ステインガー）本体の姿は見えない。電波障害  
によって通信機も使えない。すでに戦う意味などない状態なのだとしたら……。

「先輩……？」



小首を傾げるモカの動きに合わせて、彼女の焦げ茶色のショートヘアがさらりと揺れた。弱気になっているのを悟られたかもしれない。

「……………」

もし彼女が同調して逃げたいと言えば、迷わず賛同する。言い訳が欲しかった。自分が助かるためでなく、モカを死なせないための。

「——がんばりましょう、先輩！」

自分に対して委縮しなくなってから、モカは基本的に声が大きい事にリツは気付いていた。というより、無駄に元気と言うべきだろうか。

「すごい『二つ名』持ちばかりで、大型新人もいるんです！ きっと、なんとかしてくれませよ！！」

違う。本来はおとなしい性格の自分を、元気に振舞う事で奮い立たせているのだ。今も握った拳が震えている。不安で仕方ないのに、リツを励まそうとがんばってくれているのだろう。

こんなにもがんばり屋で良い子を、ずっと蔑ないがしろにしてきた以前の自分を殴りたくなる。

「……モカ——」

「あ！ 初めて名前で呼んでくれました!!」

「え……?」

そういえば、そうかもしれない。ずっと面倒な後輩として接してきたため、まともにコミュニケーションを取ってこなかった。だから、モカと向き合うようになってからも、彼女の名前を呼ばない事に今まで違和感を覚えなかったのだ。

「あの、私も『リツ先輩』って呼んでいいですか……!!」

「……………」

「いいですよね!? 駄目でも呼びます！ リツ先輩……!!」

「っ……………」

恥ずかしい。恐らく赤面してしまっている。それを見られるのも、動揺を隠せていないのも、何もかも恥ずかしい。

「ちよ、やめて……なんか恥ずかしい……」

「照れてる先輩、可愛いです！」

「調子に——あ……」

言いかけて、リツは続く言葉を失った。

地上を蠢く幼体群に、次々と機力の弾丸と思われる光が撃ち込まれていくのが見えたのだ。〈機獣少女〉のほとんどが近接型で、飛び道具を使わない。〈カタストロ〉との戦い

を続けるうち、そういう風に最適化されてきたのだ。

しかし、どんなものにも例外は存在する。

「ユズキさんとイカルガさんです！」

「〈FA::Gエンタテインメント〉の二人……」

飛び道具を使う〈機獣少女〉といえば、派手なアクションと装備によるパフォーマンスが売りの事務所である〈FA::Gエンタテインメント〉の所属と考えて、まず間違いない。

もつとも、彼女等の拠点は〈クシマ撤退戦〉の舞台となったクシマ・シティで、その作戦の際に多くの所属〈機獣少女〉が犠牲になったと聞く。ライカ・ユズキとバナラ・イカルガはその生き残りだった。

「すごい……」

鎧武者を彷彿とさせる、白と淡藤色のMBジャケットに身を包み、血で染まったかのようなカタナで敵を両断していくライカ。銃も使ってはいるが、どちらかといえば牽制用の副兵装として用いている印象を受ける。

銃をメインに使っているのもう一人——バナラの方だろう。黒とコバルトブルーのMBジャケットを纏い、ライカの物より大型の銃で以て〈ステインガー〉の幼体を撃ち抜いていく。

役割分担が決まっているのか、前衛がライカで、バナラは援護に重きを置いているように見える。リツが驚愕したのは、各々の実力もあるが、それ以上に彼女等の高度な連携に対してだった。

「リツ先輩！ あれ！」

「飛んでる……？」

モカの視線を追うと、リツの目にも彼女が見ていたものが映った。低空ではあるが、背中に生えた機械の羽根で飛行する〈機獣少女〉が見えた。両腕に装備した獣の爪を思わせる手甲と、恐らくは姿勢制御装置であろう多関節の尻尾も相まって、ファンタジーに登場するドラゴンを彷彿とさせる姿だ。

クラウ・P・ブラン。

モカの言っていた『大型新人』の一人である。クラウは低空を旋回し、バスケットボール大の光弾を撃ち出し、時には両腕の手甲から生成したレーザー・ブレードを使い、地上の幼体群を殲滅していく。

「——お二人とも、ご無事でなによりですわ」

三人の強さに半ば呆気にとられていると、避難していた屋根にもう一人の作戦参加メンバーが優雅に降り立った。

軍服を思わせるスーツと、ミニスカートという出で立ち。優雅で、色香を感じさせる、少女と呼ぶには妖艶な雰囲気纏った娘である。

ルイゼ・ルンシュテッド。

またの名を〈竜帝〉リュウテイ。

『二つ名』持ちにして、東方大陸トップクラスの〈機獣少女〉の一人である。

彼女等が駆け付けてくれたという事は、それぞれの持ち場での役割を終えたのだろう。

やはり実力者は違々と、安堵と共にリツは密かに嘆息した。

「……正直、助かったわ」

「皆さん、持ち場は……」

「ワタクシ達の役目は果たしました。なのでこうして、お節介を焼きに参上した次第です」

やはり、そういう事らしい。

『弱いお前達を助けに来てやった』と言わないのは強者の余裕か——そんな風に考えてしまっただけで嫌になる。

(……性格悪いな、私)

だからモカにも冷たく当たっていた。態度にこそ出さないが、そういう思考をしてしまっただけで嫌いだ。

「この付近の幼体を殲滅した後、ボーグマン・シングウジのペアと合流。場合によっては〈ステインガー〉に対して総攻撃を行います」

ルイゼの口振りから、彼女等も〈ステインガー〉を倒せたかは知らないのだろう。まだ手放して喜べる状況ではないらしい。

「お二人はどうされます？ すでに役目は立派に果たしてくださいました。限界のようなら、此処でお休みになっていてください」

「——っ」

『ふざけないで』——という言葉が喉まで出かかった。ルイゼの言葉に挑発的な意味合いは皆無で、リツとモカの実力を鑑みた、むしろ最大限の敬意が含まれていた。腹が立ったのはルイゼの発言に対してではなく、そう言わせざるを得ない自分の実力だ。

「いえ！ まだ戦え——」

「ええ、そうね。悪いけど凡人の私達は此処までで限界だわ」

異を唱えようとしたモカの言葉を、リツが遮った。

もうモカを戦わせたくない——いや、これ以上戦って死なせたくない。

「先輩……」

自分に向けられた後輩の音が沈んでいるように聞こえたのは、リツの被害妄想のためだろうか。途中で音<sup>ね</sup>を上げたと言<sup>ね</sup>減されたかもしれない。もう先輩などと呼んでくれないかもしれない。

(それでもいい。これはモカを<sup>ないがしろ</sup>蔑<sup>ないがしろ</sup>にしていた頃の自分への罰だ)

ほんの少し前まで、面倒な後輩と思つて接してきた。今更、尊敬される資格などないのだ。

「……………私も此処<sup>ここ</sup>に残ります」

「……………」

モカの力ない声に、これまでに感じた事のない痛みがリツの胸を襲った。

彼女はどんな顔をしているだろう。リツには、それを確かめる勇気はなかった。

「……………。判りました」

それだけ言い残し、『二つ名』持ちの〈機獣少女〉は二人に背を向けた。ひよつとしたら

ルイゼはリツの気持ちに気付いていたのかもしれない。だから彼女の卑屈<sup>ひくつ</sup>な台詞<sup>せりふ</sup>に対して、肯定<sup>こうてい</sup>も否定<sup>ひてい</sup>もしなかったのではないだろうか。

(格好悪いな、私…………)

せめて再び戦場に戻る戦士を見送ろうと、リツがその背に視線を向ける。すると、風に靡<sup>なび</sup>くルイゼの紅いロングヘアの遥か先に、禍々<sup>まがまが</sup>しいものが見えた。

(…………なに?)

リツは目が良い。〈機獣少女〉となった今、その視力はより強化されている。それは少しずつ大きくなっていき——いや、違<sup>ちが</sup>う。此方<sup>こちら</sup>に向かって高速で迫っているのだ。

(まずい…………!?)

飛来する物体の禍々しさに危機感を覚えた本能が、思考を急激に加速させる。

「——〈竜帝〉ッ!!」  
リュウテイ

リツは咄嗟<sup>とつさ</sup>にルイゼの背中に叫んだ。

即座に自分の行動が軽率だったと気付いた。

ルイゼほどの〈機獣少女〉であれば、何かしらの警告だと気付く。実際、彼女は飛来する物体に気付き、反射的にその場を離脱した。生物として当然の行動だ。そして、その当然の行動の結果がどうなるかも、彼女は気付いてしまったらしい。表情を見れば判る。だが、もう遅い。離脱を選択した彼女に、高速で飛来する物体を阻止する術<sup>すべ</sup>はない。

リツが警告を発さなければ、あるいはルイゼが『盾』になってくれたかもしれない。あのタイミングが離脱するにはギリギリだった。それ以後なら防ぐしかない。彼女が防げる保証などなかったし、最悪、リツとモカ諸共<sup>もろとも</sup>、三人とも死んでいたかもしれない。それ

でも、自分達が生き残れる可能性があった。ルイゼを危険に晒し、最悪、犠牲にさえすれば……。

リツは、その可能性を自分でゼロにしてしまったのだ。

そんな事を考えた自分が嫌になり、無意識とはいえ、そんな事をせずに済んだ自分に安堵もした。モカを護るためとはいえ、これ以上、格好悪くなりたくなかった。

極限状態によって思考が加速しているためか、世界がスローモーションに見える。スポーツ選手などの同様の体験を聞いた事があるが、なるほど、こういう状態を言うのだろう。

それでも、脅威はすぐに到達する。モカは反応出来ておらず、リツが彼女を抱えて離脱するのも今からでは不可能だ。直撃は避けられても、着弾による影響からは逃れられない。

恐らく、あれはそれくらいの威力を秘めている。

(……………)

MBデバイス（シューツェン）を槍使い独特の低い姿勢で構え、リツは高速で飛来する物体に向かって——突貫した。



東方大陸最南端——いわゆる封鎖区域とされている方角から北上する大型車両があった。惑星ゼヘナの多くを占める荒野であつても走破可能な、ホバー走行式のカーゴトレーラーである。ヘヒナミ総力戦の参加メンバーを送り届け、封鎖区域にある（ステインガー）の封印施設の調査を終えたロゼット達だ。

……………

長時間の移動も考慮した車両のため、車内には仮眠室があり、現在の乗車メンバー全員がこの部屋に集まっていた。ちなみに、自動操縦に設定してあるため、運転手は必要ない。車内にはロゼットとアニス、そしてアサトだけだ。

いや、『だけだった』と言うべきか。封印施設の調査中、同行者が増えたのだ。あるいは、ない空間で見つけた、いるはずのない人間。仮眠室にいる全員が、ベッドに眠る新たな同行者を見つめ、無言になっていた。

少女である。

年齢は十五歳くらい。高校生になったかどうかといった頃だろう。ポニーテールにしたセミロングの黒髪が似合う、まだ綺麗というよりは可愛らしい印象だ。

少女の名はアヤカ・シユバイツァー。

人類初のMBドライバーにして（始まりの機獣少女）。

これらはすべてアニスによって語られた情報で、詳細はアヤカをカーゴトレーラーに運んでからとなった。

「アニス、そろそろ聞かせてもらっていいかな」

アヤカが眠る隣に並んで置かれた別のベッドに腰掛け、ロゼットが会話の口火を切る。

「……そっだな。順を追って話そう」

アヤカの眠るベッドを挟んで、ロゼットの正面にいるアニスは、入口横の壁に背を預けるようにして、両腕を組んだ姿勢で立っている。ちなみにアサトは、空いているとはいえベッドにロゼット並んで座るのは躊躇<sup>ためら</sup>われたため、アニスに倣<sup>なら</sup>ってアヤカの足側の壁にもたれている。彼女を中心に三人が三角形の頂点を形成するような配置だ。

「アサト君、立ってて疲れない？ 此处<sup>ここ</sup>、座れば？」

長い話になるかもしれないと思い、ロゼットがぼんぼんと自分の隣のスペースを勧め<sup>すす</sup>める。無論、ただの善意なのだが、アサトは心なしか気まずそうな表情で「……此处<sup>ここ</sup>でいい」と断った。やはり男の子はよく判らない。

「始めてよいか？」

「ああ、ごめん。始めて」

まだ始まってこそいないものの、自分で口火を切っておいてアニスを待たせた事を謝罪するロゼット。もともと、アニスは気を悪くした様子はなく、これから話す内容の重大さでそれどころではないといった雰囲気だった。

「……封印施設で見つけた、あるはずのない空間。其処<sup>そこ</sup>に入った時、我<sup>われ</sup>は強い違和感を覚えた。何かとんでもない事を忘れてしまっているのに、それが何か思い出せない。そんな違和感だ」

〈ステインガー〉の封印施設内にある、ほぼメンテナンスのためだけの通路。その最奥<sup>さいおう</sup>の壁が破壊されており、ロゼットも知らない場所があった。部屋と呼ぶには何も無い、照明器具すら設置されていない空間。

「だが、紅<sup>あか</sup>い髪の少女が現れ、アヤカ・シユバイツァーと入れ替わるように消えた時、我は思い出した。恐らく、あの少女の消滅と共に、我の記憶を改竄<sup>かいざん</sup>していた力が消えたのだろう」

「……何を思い出したの？」

記憶の改竄<sup>かいざん</sup>というのも気になったが、ロゼットはまずはそこから聞く事にした。

「ロゼット、機獣少女に死者や重傷者が出たのは、フレケース<sup>フレイクス</sup>が出現して以降だな？」

「うん。記録上はそうなるけど……これまでの〈カタストロフ〉との戦闘では、初期こそ軽傷を負う〈機獣少女〉はいたらしいけど、システムと戦術が確立してからはそれもな

くなつたつて」

どんなものも試行錯誤の末に完成に至る。〈機獣少女システム〉として例外ではない。

「過去にも多くの〈機獣少女〉が犠牲となる戦いがあった。百年ほど前の事だ」

「百年つて……そのくらいなら記録が残つてるだろうし、そんな出来事をアニスが忘れるなんて——」

はつとなり、ロゼットが言葉を失う。似たような話を、しかもつい最近になって聞いた覚えがある。

「世界改変……」

無言で話を聞いていたアサトがぼつりと呟いた。

そう、アサトの暮らす地球でも同じような現象が発生した。ゼヘナの〈機獣少女〉であるツバキ・タカチホが〈カラストロ〉と共に転移し、少なくとも影響を与えたにも関わらず、そんな事実は最初からなかった事となった。器物の損壊もなく、犠牲者もなく、誰の記憶にも残っていない。例外は事件の渦中にいたアサトと流遠やみひめ、記憶を取り戻す形で思い出したクラウ・P・ブラン、そして改変前に現地を離れたツバキと〈カグツチ〉——厳密にはツバキを地球に送り届けたフアフロウ姉妹も含まれる——のみ。

「百年前に、ゼヘナでも世界改変が起きたつていうの……？」

「肯定だ」

封印施設の目的は〈ステインガー〉の脅威だけでなく、忌まわしい事件を人々の記憶から消し去るためだったのだとアニスは語った。

「なら、なんでこの子は封印施設にいたんだ？」

アサトは、穏やかな寝顔で眠り続けるアヤカを一瞥して言った。

「……多分だけど、MBコアの代わりなんだと思う。〈シエネレーター〉と同じ原理で、彼女の〈機獣少女〉としての力をエネルギーにして、あの封印施設の機能を維持してたんだ」  
ロゼット・コダールとは襲名制だ。代々の襲名者が、封印施設のメンテナンスを義務付けられる。自分も含め、誰も封印施設の真相に気付けなかった事に、ロゼットは忸怩たる思いだった。だがそれも致し方ない。ほぼメンテナンスフリーの施設なため、異常があれば正常な状態に修復するのみで、大掛かりな作業をする機会はなかったのだから。

「にしたつて、百年前の話なんだろ？ 百歳越えてるようには見えないが……」

「紅い髪の少女の力だ」

アサトの疑問に、あっさりと答えるアニス。

「知ってるんだね、あの紅い髪の女の子の事も」

「すべて思い出したからな。これも順を追って話そう」

アニスの語る百年前の出来事。それは一人の〈機獣少女〉の誕生に端を發する。



何が起きたのか、モカは思考が追い付かなかった。

リツがルイゼに向かつて声を上げ、すぐさま〈シューツェン〉を構えて飛び出していた。結果的にリツに道を譲るような形となったルイゼが、離脱しながら何か叫んでいた——恐らくは『逃げる』といった内容——が、モカは呆然とリツの背中を目で追う事しか出来なかった。それから衝撃が辺りに奔り、強烈な光と音で感覚が麻痺した。

「ん……」

ようやく視力が戻ってきた。場所は先ほどと同じ民家の屋根の上だが、建物自体は倒壊してしまつたらしく、目線はほぼ地面と同じ高さになっていた。重量が軽く、固定されていなかった物は一切合切吹き飛ばされたらしく、瓦礫は大きい物しか散乱していない。だから、モカはすぐにそれを見つけてしまった。埃と血に塗れ、仰向けになった胸から馬上槍を生やし、物言わぬ骸となつて転がっている少女の姿を。

「……………先輩？」

モカと同じ意匠の、長い丈に深いスリットが入ったスカートが特徴的なMBジャケット。ベリーショート黒髪。その傍らには、彼女の愛機である槍タイプのMBデバイス〈シューツェン〉があった。

間違いない——リツだ。

「あ……あ……嗚呼……っ」

認めたくない。だが、目の前の状況を理解出来る程度の冷静さがモカには残っていた。いっそ錯乱してしまえば、この現実から目を背けられるのに、彼女の理性はそれを許してはくれなかった。

「——ああ。〈竜帝〉を狙つたのに、ざっくんねん」

「——っ!？」

すぐ傍から聞こえた声に、モカは慌てて振り向いた。知っている人物だ。知人というほど交流はないし、相手はモカの事など知らないだろうが、彼女は良くも悪くも有名だから。

モカなど眼中にないのか、彼女はすぐ横を素通りしてリツに向かつていく。明るい茶色



のロングヘアが歩調に合わせて揺れ、あか紅い月の光を妖しく反射する。すでに陽は完全に沈みきっていたらしい。

「よく飛ぶわねえ。さすがは私の〈オーディン〉だわ」

〈オーディン〉とはリツの胸に刺さっている馬上槍タイプのMBデバイスの事だ。状況から見て、かなた彼方から飛来し、この惨状を引き起こした元凶だろう。そして彼女の言葉から、あれが持ち主の意図しない理由で放たれた可能性が否定された。

つまり——リツを殺したのは目の前の〈機獣少女〉という事だ。

「どうして、こんな事……っ!？」

「ん？ 抜けないわね」

モカの声など聞こえていないのか、彼女は自分の得物を抜くため、リツの腹を右足で踏みつけた。

「やめろおおお——ッ!!」

その光景に一瞬で怒りが頂点に達した。重量級の愛機を構え、躊躇う事なく真一文字に振り抜いた。直撃すれば間違いなく胴体が上下に両断されるであろう本気の一撃。

モカはこの時、初めて人間に対して殺意を抱いた。

「————」

「……………つく」

モカの渾身の一撃は、リツの胸から引き抜かれた〈オーディン〉にあっさりと止められていた。

無数の突起を備えた五十センチほどの五角柱の穂を誇る、凶器以外の何物でもない槌矛と化した〈リーピン〉だが、使い手の身長を超える、四分の三が円錐状の攻撃部分となる馬上槍ならば、受け止めるのは難しくない。無論、使用者がそれを扱うに足る人物であればだが。

「良い武器ね。エレガントではないけれど——」

「うわああああああああああああああああああああああああああああ——ッ!!」  
相手の言葉を聞かず、力押しでモカが前に出る。リツを足蹴にされている事が許せなかった。

「……聞きなさいよおッ!？」

五メートルほど前進したところで、〈オーディン〉を使う少女が激昂した。薄い緑色の瞳が大きく見開かれ、血走っているのがよく判る。普段のモカであれば気圧されていただろうが、怒りに震える今の彼女は動じない。更に相手を押し込み、少しでもこの場から遠ざけようとする。

「——あああああああああああああああああああああああああああああああッ!!」  
 「黙れえええ——ッ!!」

少女の甲冑かっちゅうを思わせるドレス・アーマー——MBジャケットの腰の辺りから太く長いものが伸び、モカの左側面を襲ったのは次の瞬間だった。

「えっ……?」

本来、槌矛ますを握るには小さく華奢きゃしゃなモカの身体からだが宙を舞った。

「かは……っ」

背中から着地し、痛みを感じるよりも、不可解な気持ちで夜空を見上げる。

何が起きた? 何をされた? 今のは何だ……?

判らないままのモカに馬上槍らんすの穂先ほが突き付けられた。三角錐すいの鋭利な先端は、少女の可愛らしい顔に突き立てられるのを今か今かと待ちわびているようだ。

(あれは……尻尾……?)

恐怖から逃れようとする無意識の行動か、モカはこの先の展開を考えるのをやめ、自分を害そうとしている相手の異形をぼんやりと観察した。確かに尻尾しっぽだ。腰の低い位置——背中と臀部でんぶの間辺りから、奇妙な形状の尻尾と呼ぶべき器官が生えている。

(似てる……〈ステインガー〉の尻尾に……)

〈ヒナミ総力戦〉の殲滅対象せんめつ。モカがこの場にいる理由。それと同じ形状の尻尾が、なぜ眼前の〈機獣少女〉に生えているのか。

「……つぐえ」

腹を踏まれ、潰つぶされた蛙かえるのような声がモカの口から漏れる。

「……がっ……っはあ……うう……」

何度も踏まれた。何度も何度も執拗しつように。

「あはっ! ざまあないわね。大した実力もないのに、こんな所に、しゃしゃり出てくるから、こういう目に遭あうのよ。身の程を知らないさいよ」

「……つぎ……つぎ……つぎ……」

息が出来ない。骨が折れているのが判る。恐らく、内蔵も……。

「なんで、あんたみたいなのが一緒に戦えて、あいつは私の事を見向きもしないのに……!」  
 何を言われているのか判らないのは、相手が支離滅裂なのか、痛みで自分の理解力が低下しているからなのか、モカにはそれすら判らなかつた。もう痛みも感じない。きつこのまま死ぬのだろうか。

(そしたら、また会えるのかな。『がんばったわね』って言ってくれるかな……)

迷惑をかけているのは気付いていた。それが申し訳なくて、足手まといになりたくなく

て、自分なりにがんばっても駄目で、それがようやく認めてもらえて、仲良くなれて、やっと名前で呼んでもらえて、嬉しくて、ただ嬉しくて……。

(リツ先輩……！)

「ぎい——っ!!」

モカを足蹴あしげにしていた蠍さそりの尾を生やした奇妙な人影シルエットが吹き飛び、原形を留めていたビルビルの二階に突っ込んだ。入れ替わるように、モカの眼前に別の少女が降り立った。年代と黒髪で一瞬リツに見えたが、それは彼女の願望が見せた幻だった。黒い髪は長く、衣装は和服で、手にした得物えものはカタナ型のMBデバイス——

「シン……グウジ……さん……」

カナコ・T・シングウジ。

〈戦姫〉の二つ名で呼ばれる〈機獣少女〉。

「……あとは任せて」

少し離れた場所に倒れたリツを一瞥いちめつし、モカに視線を戻すと、それだけを言い残し、カナコはすぐに背を向けた。二人のひどい状態を見ても、その表情はびくりとも動かさず、見る人間によつては無慈悲にさえ感じられたかもしれない。

だが違う。リツもそうだったから判る。あの手の口数が少ない人間は、怒りが高まるほど逆に心が冷めていく。モカの瞳には、カナコの表情が怒りに震えているように映っていた。



蹴り飛ばされたビルの一室から抜け出し、地面に降り立つと、待ち構えていたように黒

髪黒瞳のひどく美しい少女がいた。

カナコ・T・シングウジ。

それは彼女にとって最大の——

「あはっ。随分ずいぶんと遅かったわね。おかげで弱い者いじめなんてし——」

「黙りなさい」

無表情に、無感情な口調で、〈戦姫〉の二つ名で呼ばれる〈機獣少女〉は彼女の言葉を遮さへぎった。

「もう話す事はないわ」

「……っ!!」

少女の異形化が進んでいく。背中を突き破って現れたのは、赤い輝きを放つ一対の羽根。



## あとがき

どうも、るとおあさ流遠亜沙です。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL』第二十二話をお届け致します。

極力、キャラは増やすまいと思いつつ、必要に駆られて生まれたのがリツとモカでした。最初は武器の特徴しか描写されないモブでしたが、再登場し、名前が付き、大きな戦いの場に参加するまでに至りました。

ただ、彼女等は他のエースと違い凡人です。凡人ではここから先は生き残れません。それでも精一杯がんばった彼女等に、少しでも心を動かさしていただけたなら作者冥利に尽きます。

それでは謝辞を。

まずはチェックをしてくださっている紙臼さんに感謝を。戦闘要員の出演は少しでしたが、彼女等の見せ場はこれからです。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。判りにくいところなどあれば、アンケートのコメント欄にてお聞かせください。コメントなしでも大歓迎です。

ようやく再登場したキリキリの出演は次回！

……憶えていますか？ 昨年最後の更新(第二十話)にも最後だけ出てたんですよ？

せりふ台詞はなかったけどな！

2018 / 10 / 7 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第2部』小説ページに戻る